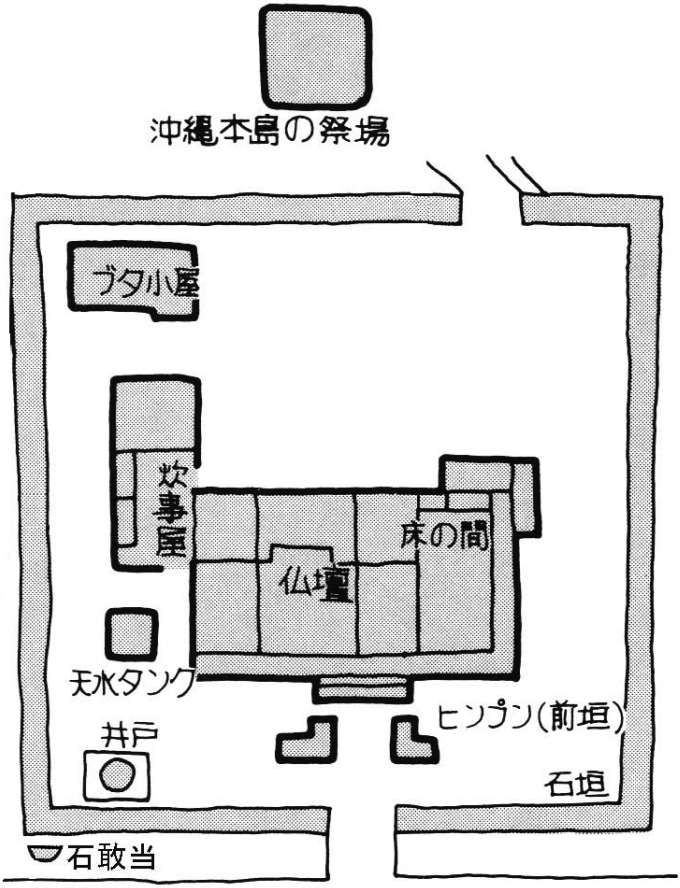
沖縄県 石垣島の家

沖縄本島よりもさらに南にある 南西諸島は、亜熱帯の島じまからなります。そのひとつである石垣島に、1871 年ごろ、琉球 国 時代の 士族の住まいとして建てられた家を 移築しました。



沖縄県 沖縄本島の 祭場

アサギと呼ばれる 村落共同 の祭場。毎年 旧暦 の 7 月には 豊作 や 繁栄 をもたらすニレー神を迎える 海人祭 が、女性たちだけで 催 されます。

気候と住まい：台風とともに暮らす

毎年７月から10月までに何度も台風におそわれる石垣島の家には、いくつかの暴風対策の工夫がこらされています。

① 豊富に採れるサンゴ石で石垣を高く積みあげる。
風が直接、家に吹きつけないようにという工夫です。

② 庭に防風林を植える。
同じく、家に吹きつける風を少しでも弱めるための工夫です。

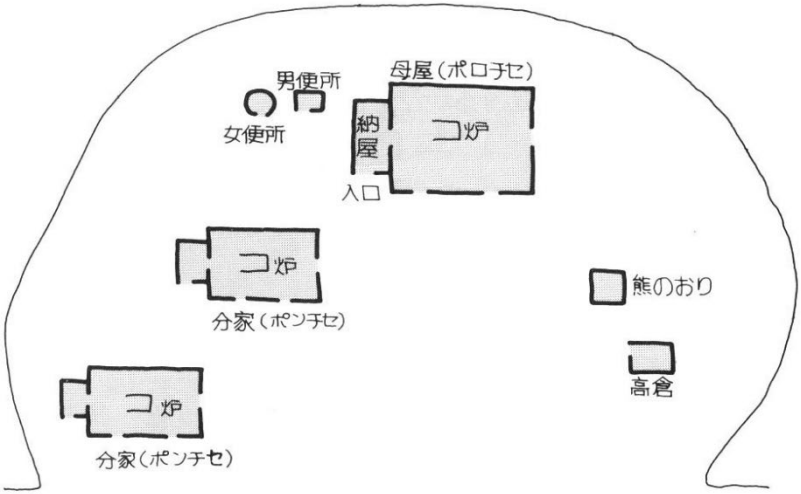
③ 屋根瓦をしっくいで固める。
屋根が風で吹き飛ばされないように“重し”の役目をもつ屋根瓦、この石垣島の家では平瓦（1 枚 1.3kg）と丸瓦（1 枚 1.9kg）を組み合わせ、およそ１万７千枚、25t もの瓦を使っています。さらに、瓦をしっくいで塗り固めて、おさえています。

④ 母屋の柱をふやし、軒を低くする。
「石垣島の家」と「山形 月山 山麓の家」とはおおよそ同じ面積ですが、石垣島の家の柱は 102 本、山形の家柱は 74 本とかなり違います。柱の数が多いのは、重い屋根をしっかりと支えるためです。軒下の高さは石垣島の家が 270 ㎝で、山形の家は 430 ㎝もあります。軒が低いことで、風は家の壁ではなく屋根の上を吹き飛んでいきます。

台風による被害を抑えるために、石垣島の人たちはいろいろな工夫をしてきましたが、まったく台風が来なくても、石垣島の人たちは困ってしまいます。この家の元の持ち主は、「井戸水は塩分があって飲めないからね」と言い、1953 年に水道が引かれるまで、屋根にふった雨水を天水タンクにためて飲料水に用いていた苦労を語ってくれました。台風は大量の真水をもたらしてくれる天からの恵みでもあるのです。

北海道　アイヌの家

北海道の先住民族であるアイヌが、１９世紀末ごろまで暮らしていたコタン（村）を、アイヌの人びとの協力で再現しています。敷地の奥にあるのが両親、手前の２棟が分家した子どもたちの家です。アイヌの人びとは炉を神様の寝床と考えたため、家は炉を中心に造られています。



【建築材の特徴】

屋根や壁に使われているのはイネ科の植物（アイヌ名：ラペンペ）で、１本１本がストローのような中空構造になっています。これらを束ねると厚い空気の層ができ、断熱材と同じ役割をはたします。アイヌは古くからこの資材の特性を活かし、自然の断熱材で家を　まるごと覆うことで、寒い時期でも比較的あたたかく暮らすことができたのです。

環太平洋交易

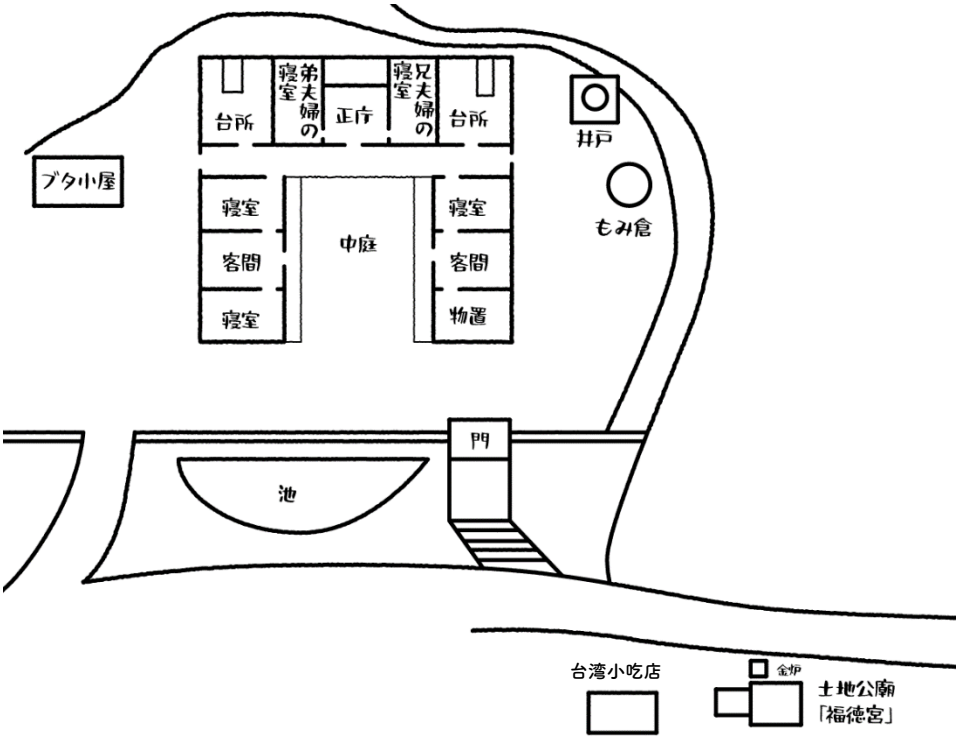
アイヌ民族は、東北地方の北部から北海道、樺太南部、千島列島にかけて古くから暮らしてきた先住民族です。かつてはアイヌモシリ（アイヌ民族の大地）の豊かな自然環境を基盤として、採集・狩猟・漁労を中心とした生活を営む一方、本州や大陸の諸民族とも活発な交易をしていました。アイヌによる交易は、大陸と日本をつなぐ架け橋の役目を果たしていたと言われます。

アイヌは製鉄の技術を持っていませんでした。そのため、南方では和人との交易で、生活必需品である鉄の小刀や鍋を手に入れました。米や酒、タバコなども好まれました。その代わりアイヌは和人に、テン、キツネ、アザラシなどの毛皮や、清（現在の中国）からもたらされた織物などを渡しました。これを和人は蝦夷錦と呼び珍重しました。北方では、山丹人と呼ばれた大陸のツングース系の人びとと交易し、アイヌは交易品として毛皮のほか、和人より入手した鉄製品の一部を渡していました。山丹人からの交易品には、矢羽に用いるワシの羽根や、薬とするセイウチの牙などがありました。蝦夷錦も山丹人との交易で得たものでした。

こうした交易は「環太平洋交易」と呼ばれています。江戸時代、徳川幕府が鎖国を始めてからもこの交易は引き続きおこなわれ、中国の織物は長崎からばかりでなく、アイヌを経由しても入ってきました。そのため、この「環太平洋交易」を、「北のシルクロード」と呼ぶ研究者もいます。

台湾 農家

この家は中国大陸南部 福建省 から 移住してきた 漢族の伝統的な農家を 復元したものです。中国南部の 建築様式の流れをくみながら、台湾の 風土に合わせ、熱帯の強い 日差しをさけるため、また 暴風雨の 侵入 を 防ぐため、壁を厚くし 柱廊 で家屋の前面をとりまき、屋根瓦 を 漆喰 で 塗り 固めるなどの工夫があります。



【台湾の 土地公 廟 ：福徳宮】

「台湾 農家」の向かいにある建物は「福徳宮」という名前の土地公廟です。福徳正神土地公と呼ばれる神さまがまつられています。土地公は民間信仰における土地の 守護 神 です。

2026.04

歴史と住まい：ふるさととのつながり

山がちな土地で食糧不足に苦しんでいた中国南部の人びとは、17 世紀半ば～19 世紀末にかけて、台湾に新しい農地を求めてたくさん移り住みました。この家は、そのような福建系漢民族の伝統的な農家で、1917 年に建てられた家をモデルに、1950 年代頃の生活を復元しています。

【三合院】

中庭を中心に三方に棟が並ぶ、このような建築形式を三合院と呼び、中国南部の流れをくむものです。中央の正庁は、祖先や道教の神々をまつっています。正庁を背にして左手が家長である兄夫婦の部屋、右手が弟夫婦の部屋で、左右から伸びる棟は、成長した子どもたちの部屋や農具置き場として使われます。こうした部屋割りは、左を優位とし、長幼の序（年上と年下の序列や順序のこと）を重んじる考え方に基づくもので、屋根の高さにも反映されています。また、赤レンガを積みあげた壁や、素焼きの瓦を重ねた屋根なども伝統的な三合院の特徴です。

☞ 兄と弟、どちらの部屋の屋根が高いかな？正面からチェックしてみましょう。

【新天地で身を守る住まい】

台湾へ移住した人びとは、争いや盗賊から身を守るために、家のまわりにトゲのある竹を植えました。また、窓を小さく、少なくし、さらにぶあつい木の扉に頑丈なかんぬき(扉が開かないようにする横木)をつけました。

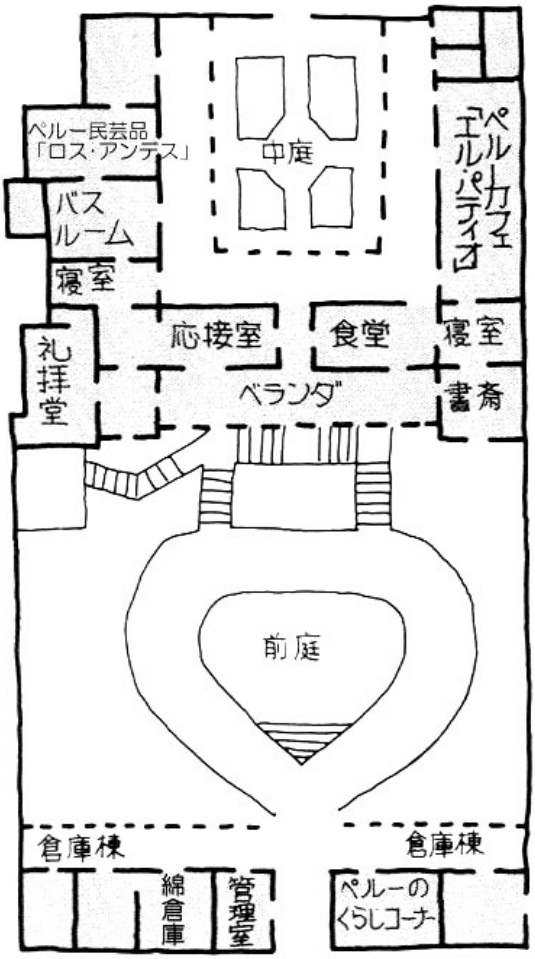
☞ ほかにも、悪霊の侵入をふせぐための工夫もあります。探してみましょう。

【風水思想】

古来より中国には、風水という理想的な環境を定める考え方があります。家屋は南向きに建て、背後に山林をひかえ、前面に池(水)を配すると良いといわれます。家族の健康や、家の繁栄を願う人びとは、風水師に相談し、地形や方位を鑑定してもらいます。

ペルー大農園 領主 の家

この家は、アシエンダと 呼ばれた 大農園 の 領主 の 邸宅を 復元したものです。ペルーの 首都リマから約７０キロほど 離れた海岸地方のチャンカイ谷に建つ「カキ」という名前の大農園の 館をモデルとしています。



【アシエンダ】

アシエンダとは、アメリカ大陸の 旧スペイン 植民地において、スペイン 系領主が 先住民のインディオやアフリカの黒人、アジア人らを 小作人とし、その労働力を使って 大規模な経営をおこなった農場のことで、16世紀末頃から 発達したものです。農地改革で 解体されるまで（ペルーでは 1969 年）、牧場や商品作物の 栽培により、莫大な 収益を上げていました。

【建築様式】

中庭（パティオ）を囲んで 回廊、そして 居室が 配置されています。この様式は、もとは 8～15 世紀にかけてイベリア半島を支配していたイスラーム世界によってもたらされたものです。

ペルー先住民の衣装：伝統と外来のミックス

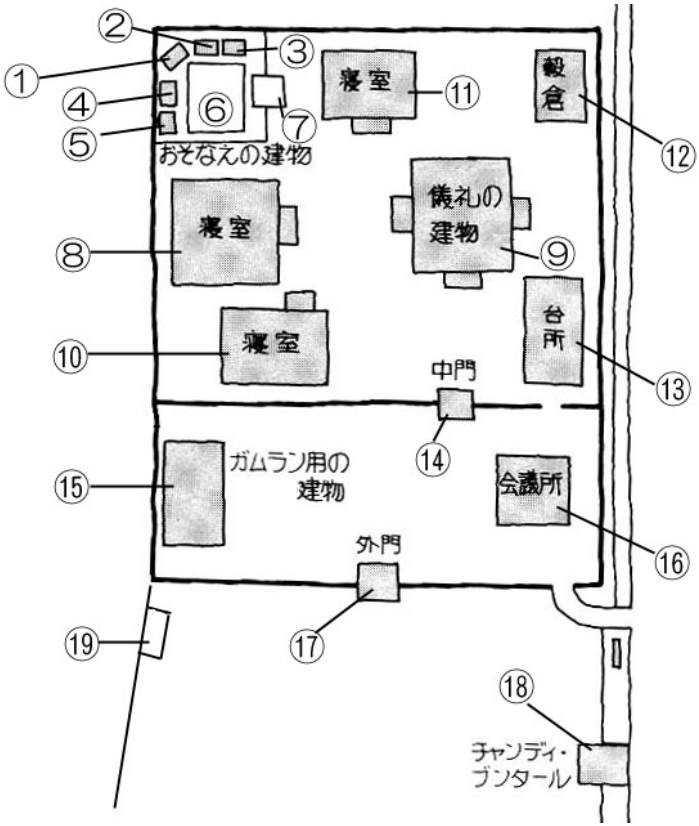
インカ帝国は、1532年にスペイン人によって征服されましたが、その後、500年近くたった現在でも、アンデス高地に住むケチュア人は、腰織と呼ばれる古くから伝わる織り機を使って、ポンチョ、肩掛け、帯などを作っています。伝統的な柄は、原色を巧みに組み合わせて表現し、見た目にとても色鮮やかです。ケチュア人の衣装は、ヨーロッパから入ってきたズボンやスカートに、これら固有の要素を組み合わせたスタイルが一般的。帽子は、山高帽や皿型帽が好まれます。

アンデスの動物：アルパカとリャマ

アンデス高地では、古くからラクダの仲間である「アルパカ」や「リャマ」が飼育されています。どちらもおとなしい性格です。毛がモコモコしてふっくら見えるのがアルパカ（写真左）で、そのやわらかい上質な毛は衣類を作るのに適しています。一方、リャマ（写真右）はアルパカに比べてスマートな印象。毛はゴワゴワしており、衣類を作るのには適していません。しかし、アルパカに比べ、一回り大きく力も強いので、農作物などを運ぶ時には大活躍します。

インドネシア バリ島貴族の家

赤道直下の火山の島、バリ島。ヒンドゥー文化の影響を受けたこの地の社会には、貴族と平民をわけるカーストを模した制度があります。展示家屋は貴族階級の屋敷をモデルに復元したもので、敷地を内壁で 3 つにわけて建物を配置しています。いちばん奥の①～⑥はもっとも神聖な区画で、ヒンドゥーの神がみや祖先をまつる屋敷内の寺院（祭祀場）があります。⑧～⑬の中央部分は、儀礼の建物を中心に寝室、穀物庫、台所が建ち並ぶ生活の場であり、⑮～⑯の手前の部分は、お祭りや儀礼のときに余興として踊りやガムラン演奏をする場です。



インドネシア バリ島の衣装

バリの女性の普段着は、カインと呼ばれる無縫製の帯状の一枚布を体に巻くものでした。今ではイスラームやヨーロッパの影響もあり、ヒンドゥー教を信仰するバリ島でも女性は肌を隠すようになり、ブラウスやスカートといった装いをしていますが、お祭りや結婚式、舞踊ともなると華やかな衣装を身にまといます。

バリの舞踊には大別してワリ、ブバリ、バリバリアンという３種があり、舞踊によって衣装は異なります。ワリは、寺院内の儀式で神様のために踊る神聖なものです。ブバリも神聖な舞踊ですが、物語にそって舞います。バリバリアンは娯楽性が高く、神様と人間の両方が楽しむものであり、たくさんの人が観覧できるように、寺院の前の集会所などで踊ります。

マルハナバチの踊り（オレッグタンブリリンガン）

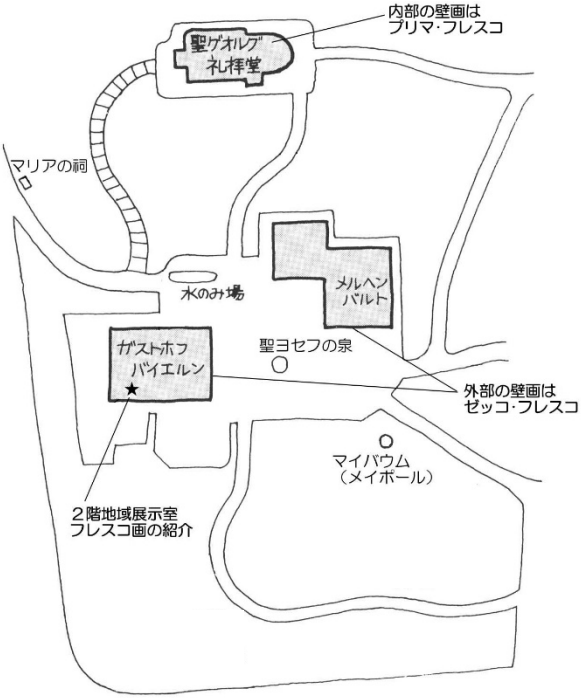
バリバリアンには、レゴンやバリスといった有名な舞踊のほかに、オレッグタンブリリンガンという舞踊があります。

“オレッグ”は「柔らかく、しなやかな」、“タンブリリンガン”は「マルハナバチ」という意味です。この舞踊の女性役は、冠とブンガ・マス(金の花)というかんざしで飾り立てた女王様のような衣装をまといます。

物語は、伝統的なバリの恋物語を表しています。美しい花園で恋をした若い男女のハチが舞い踊る様子は、若いバリの人びとの求愛の儀式を象徴しています。今日バリでは盛んに新たな舞踊が作られており、これも 1950 年代に創作されたものと言われています。

ドイツ バイエルン州の村

ドイツ南部、バイエルン州のガルミッシュ・パルテンキルヘン周辺をモデルとして、のどかな美しい村の情景を復元しています。村は聖ヨセフの泉を中心に、色あざやかなフレスコ画の外壁をもつ２棟の民家と、丘の上の礼拝堂からなります。



ガルミッシュ･パルテンキルヘンは、バイエルン州の州都ミュンヘンの南方90km、オーストリア国境近くにあるアルプス山麓の村です。小さい町ですが、冬のスポーツ、温泉療養、夏の避暑地として多くの観光客が訪れるリゾート地として有名です。このあたりの家並みの特徴は、街路にそってならぶ商店や民家の外壁に美しい壁絵が描かれていることです。この壁絵は300 年近くの歴史を持ち、「風の絵」と呼ばれ、またその壁絵を描く画家は「風の画家」と呼ばれています。

風の絵とその技法

「風の絵」という名前のいわれは、そよ風のような手早さで描きあげなければならないフレスコ画特有の描き方に由来します。リトルワールドのフレスコ画は、2 つの技法で描かれています。ひとつは礼拝堂内部のプリマ･フレスコ、もうひとつは 2棟の民家の外壁に見られるゼッコ･フレスコです。それぞれ次のような特徴があります。

＜プリマ･フレスコ（真正フレスコ）＞
壁の石灰モルタルが湿っている間に、顔料を水とともに浸透させる技法です。みずみずしい美しい色調ですが、一日に描く範囲が限られます。

＜ゼッコ･フレスコ（乾式フレスコ）＞
壁の石灰モルタルが乾燥した状態で、顔料を水ガラスで溶いて浸透させる技法です。風、雨、陽光による褪色に強く、外壁に適していますが、描写時と乾燥後の顔料の発色に差があります。

ゼッコ・フレスコ画

「ガンブリーヌス」

ビールの国ドイツでは、ガンブリーヌスはゲルマン人にビール造りを教えた神様（あるいは王様）。

プリマ・フレスコ画

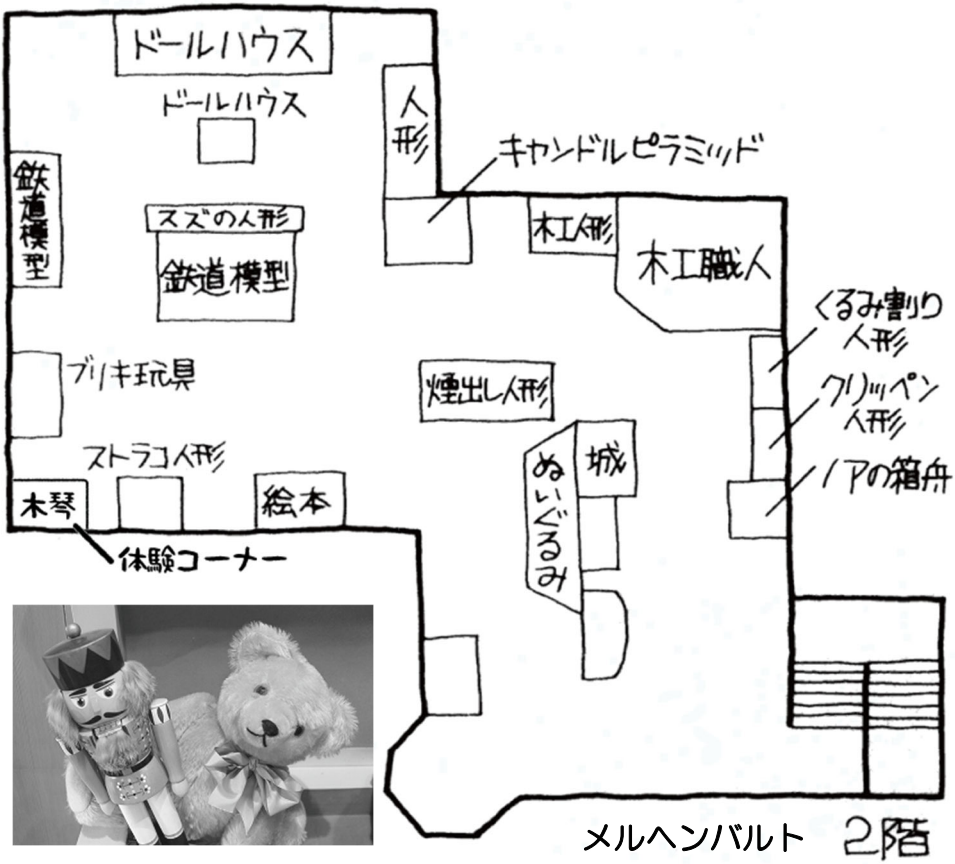
「聖母の戴冠」

父なる神、その子イエス・キリストとハトの姿の聖霊から黄金の冠を授かり祝福を受けるマリア。

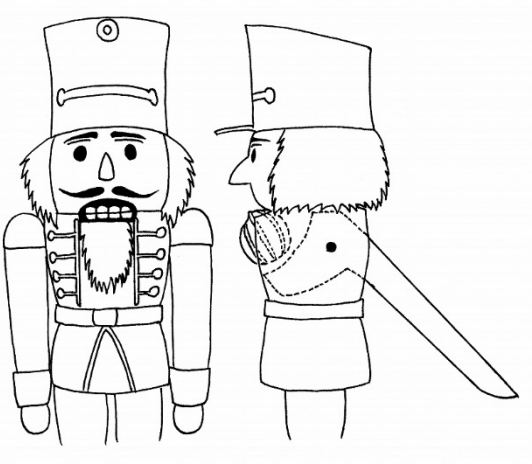
ドイツ バイエルン州の村

おもちゃ王国ドイツ

世界で初めて産業としておもちゃ作りを始めたドイツ。今でもおもちゃ王国として有名な国です。世界的に人気のあるテディベアもドイツで誕生しました。メルヘンバルト２階玩具展示室では、木製やブリキ製のおもちゃ、ぬいぐるみなど、今なお世界中で愛され続ける温かみあふれる手作りのおもちゃをご覧いただけます。

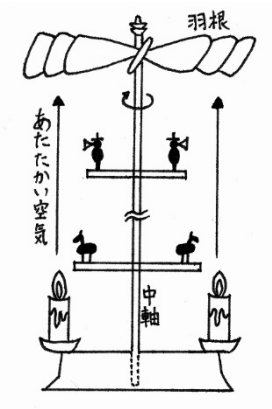


クルミ割り人形



口にクルミを入れて、背中のレバーを下に動かすと、クルミがパカッと割れるしくみになっています。あごとレバーはつながっています。人形には大小さまざまなタイプがあり、実際にクルミを割ることができるのは、口にクルミが入る大きなものだけです。人形は王様や兵隊などの人物がモチーフになっていることが多く、日頃いばっている人に固いものを噛ませてやれという皮肉の意味が込められています。

キャンドルピラミッド



かわいくておしゃれなキャンドルピラミッド。ロウソクに火を灯すと、そこから昇る温められた空気により、上にあるプロペラのような羽根がゆっくりと回転しはじめます。

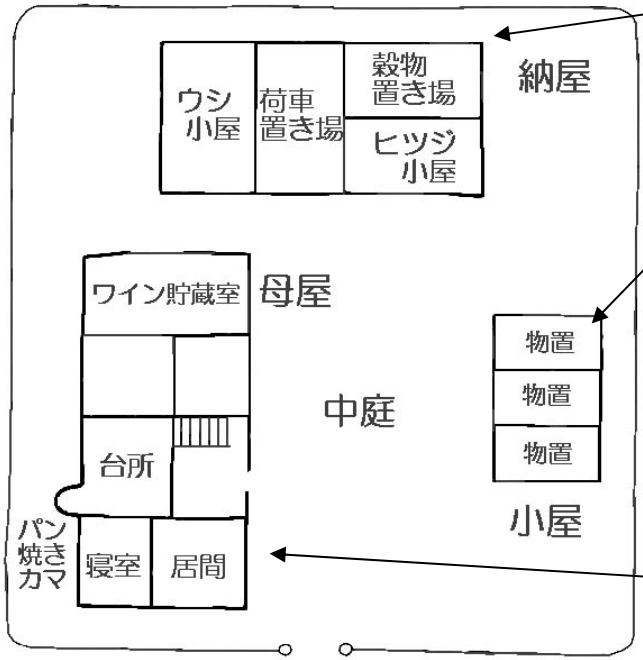
羽根の中軸に取り付けられた円板の上にいる人形たちもメリーゴーランドのようにくるくる回ります。

テディ・ベアの“テディ”とは？

ぬいぐるみの歴史の中で、変わらず広く親しまれているテディ・ベア。クマのぬいぐるみの代名詞ともなっている「テディ」は、アメリカ第 26 代大統領セオドア・ルーズベルトの愛称です。クマ狩りに出かけたルーズベルトが小グマを助けたというエピソードからヒントを得て、ドイツのマルガレーテ・シュタイフが 1903 年から製作をはじめ、一躍世界中にその名が広まり高い人気を得ました。

フランス アルザス地方の家

フランス東北部、ドイツと国境を接するアルザス地方で、ウシやヒツジを飼うとともに、ムギ、ジャガイモ、トウモロコシ、ブドウなどを栽培している農家を復元しています。
庭を囲むように母屋、納屋、小屋を配置し、1850 年代、アルザスの農村に伝統的な暮らしぶりが残っていた時代の様子を再現しています。



２階には冬用の干し草をたくわえておきます。

２階は使用人の部屋です。

２階は若夫婦の居室となっています。

【内陸性の気候】

パリから東へ 500km にあるアルザス地方は、西にヴォージュ山脈があるため、大西洋の影響をあまり受けず、やや内陸性の気候となっているため、雨は年間1,000mmほどと比較的少なく（リトルワールドのおよそ３分の２)、夏暑く、冬寒い土地柄です。

アルザスの伝統衣装

アルザス地方の女性の伝統衣装は、ギャザースカート、黒い胸飾りがついたブラウス、頭には蝶結びのリボンをつけたものが一般的です。リボンをつける習慣は、19世紀初めから広まったとされています。男性は、黒いズボンと上着、赤いベストを着て、帽子をかぶります。女性のリボンは信仰する宗教によって大きさが異なっており、大きいものはプロテスタント、小さいものはカトリック教徒であることを表しています。

出典：「Mon Village」, Hansi 作

コロンバージュ（木骨構造）の家

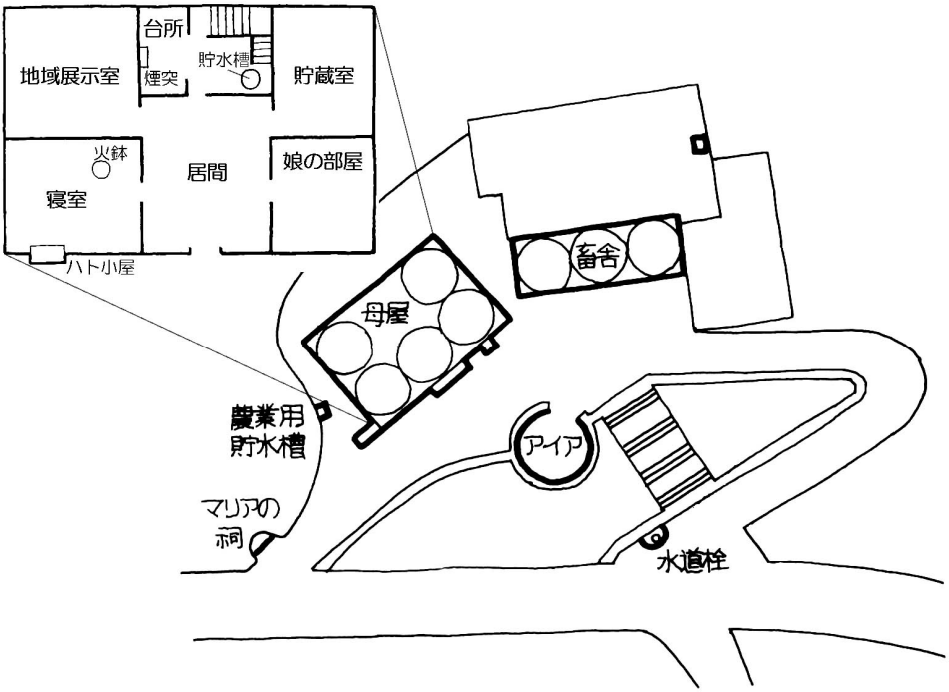
母屋は、1582 年に建てられたものです。リトルワールドへ持ってくるために解体した 1985 年まで、9代にわたって住まわれていました。3 階建て、白いしっくい壁に柱や筋かいなどが浮き出ている点が特徴です。このような建築様式は、中部ヨーロッパ独特のもので、コロンバージュ（木骨構造）と言われています。筋かいには、「ムギの穂」や「アンドレの十字架」のデザインが見られます。

さがしてみましょう

雨戸にあいたハート型の穴は、明かりとり。
また、邪視をふせぐ魔よけの意味ももっています。

イタリア アルベロベッロの家

イタリア半島南部、プーリア州アルベロベッロ郊外の農家をモデルに母屋、畜舎などを復元し、地中海性気候の風土のもと、ウシを飼いながらオリーブなどの果樹を育てる農家の暮らしを再現しています。



【純粋な石造りの家】

アルベロベッロの伝統的な家屋は、とんがり帽子の屋根を持つことが特徴です。屋根は平たい石を積み上げてつくり、このような屋根をいくつか持つ家屋をトゥルッリと呼びます。トゥルッリは、床、壁、天井、屋根すべてを石で造ります。材料は、アルベロベッロ近郊で採れる石灰岩です。

歴史と住まい：脱税が生んだ世界遺産

【地名の由来】

“アルベロベッロ”という舌をかみそうな名前は、「美しい木」という意味です。現在はゆるやかな丘陵地帯にオリーブやブドウ、アーモンドなどの畑がひろがっていますが、かつては樫の森であったため「美しい樹木のある森」と呼ばれていました。

【アルベロベッロ集落のはじまり】

そんな美しい森を開墾し畑をひろげ、
今のアルベロベッロに集落ができたのは、
500 年ほど昔のことです。

【王さまと領主】

この頃、ここはある王さまの領土で、王さまに任命された領主が支配しており、王さまは、新しい住民や新築の家を報告して税金を納めろと領主に命令していました。家の軒数で税金の金額を決めていたのです。

【脱税】

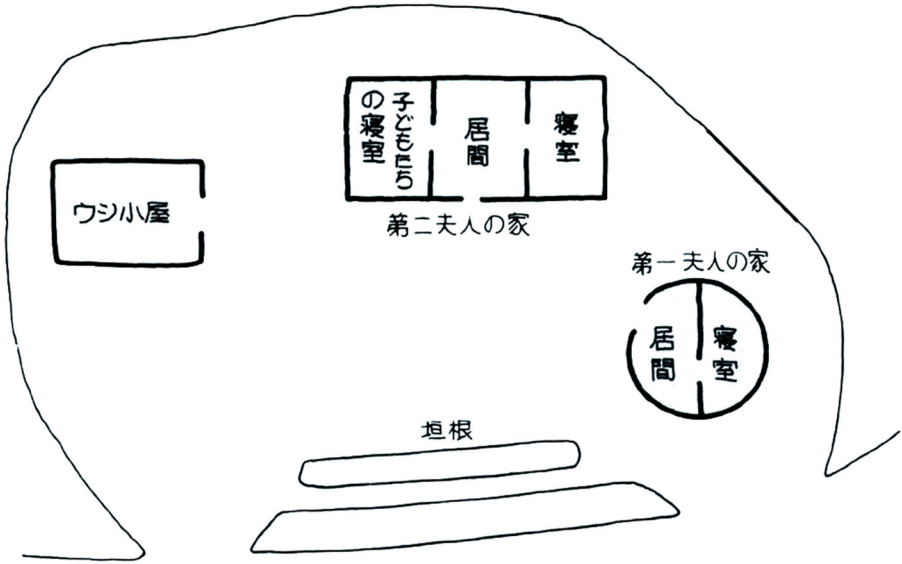
悪いことを考える人は古今東西どこにでもいるようで、このアルベロベッロの領主は、王さまの命令に背き税金を逃れる方策を思いつきました。“家の数で税金が決まるのなら、家の数を減らせばいい、家をいつでも壊せるように造ればいい。”何とも乱暴な思いつきで、農民たちはトゥルッリを造らされ、住まわされたのです。

【世界遺産】

セメントなどを使わずに単に石を積み上げただけ（空積み）の家ならば、王さまの役人が不意に視察にきても、すぐに屋根を壊してやり過ごすことができ、造り直すことも簡単でした。簡単とはいっても住民にとっては大変な苦役でした。しかし、18 世紀末まで続いた歴代領主の脱税行為のもと、トゥルッリ造りの技術は進歩しました。
トゥルッリの街アルベロベッロが生まれ、発展し、今日では人類共通の文化としてユネスコの世界遺産にも指定されています。

タンザニア ニャキュウサの家

ニャキュウサの人びとは、東アフリカ、タンザニア南西部の山地、標高500～2000mのところに住んでいます。彼らが住むニャキュウサ・ランドは年間降雨量 2000mm 程度で、農耕に適した土地です。家畜としてウシを飼いながら、バナナ、トウモロコシなど 40 種近くの農作物を栽培して暮らしています。



丸い家と四角い家：大きさの違いはえこひいき!?

ニャキュウサは一夫多妻制の結婚制度をもっており、妻たちはそれぞれ別の家をもっていますが、一家の主人の家はありません。円形の家は四角い家よりも古いタイプです。第１夫人の子供たちはすでに親元を離れ、畑のそばに新しい家を建て、共同生活を始めていますが、第２夫人の子供たちは幼いので家が大きいという想定です。

ニャキュウサ女性の衣装：カンガ

【カンガとは？】

カンガはタンザニア、ケニアを中心とした東アフリカ（スワヒリ地域）に住む女性に広く着用されています。その始まりは 19 世紀中頃、海岸部に住む女性たちによって考えられ、広まったといわれています。

【カンガの着かたと特徴】

カンガは大きさ 1.6m×1.1m 程度の木綿の布です。2 枚で１組とするのが基本です。１枚は胴から下を覆い、もう１枚で上半身を覆ったり、頭に巻いたり、肩にかけたりして使います。同じ柄のものが２枚１組で売られますが、着る時には上下同じ柄でそろえることもあれば、別々の柄を組み合わせることもあります。

巻き方は何通りもありますが、腰に巻きつけるスカートスタイルが多く見られます。また、カンガは赤ちゃんの負ぶい紐やゆりかごにも利用されます。日常の服としても、祝い事や祭りのおしゃれ着としてもカンガは活躍します。

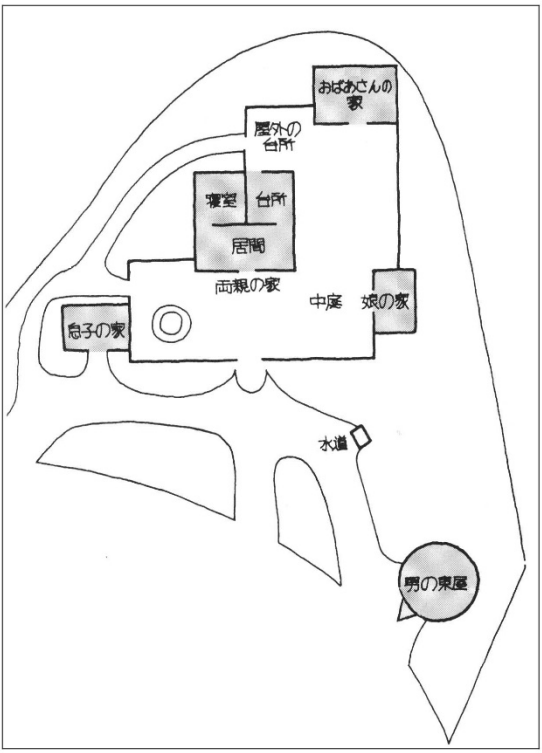
プリントされる柄は無数にあり、次々と新しいデザインが出回っています。カンガにはプリント柄のほかに、スワヒリ語の格言やメッセージが記されています。

【カンガから見えるアジアとのつながり】

カンガはタンザニア、ケニアのほかにもインドやマレーシア、中国でもデザインされ作られています。スワヒリ語を使っていない国でスワヒリ語が印刷されているのは興味深いことです。カンガに限らず多くの物がアフリカとアジアを行き来しています。東南アジア諸国（タイ、マレーシア等）では、衣料品、日用雑貨、電化製品などを買い付けに来たアフリカからの交易人の姿が見られます。その中にはニャキュウサ人の交易人もいます。

南アフリカ ンデベレの家

アフリカの最南端、南アフリカ共和国の内陸部、標高900～1500mの高原地帯に住む民族の家屋です。ンデベレの人びとは、もともとは広大なサバンナでウシやヒツジを飼う牧畜民でしたが、現在では大部分の人がプレトリアやヨハネスブルクといった都市や農場で働いています。



【創出された装飾文化】

ンデベレは、都会近くに住んでいたため、早い時期から白人文化の影響を強く受け、昔ながらの習慣を失い、新たな文化を創り出していった民族です。色あざやかな幾何学模様の壁絵をもつ家や、ガラス製のビーズ細工の装飾品をつけ、アクリル製のカラフルな毛布をまとう民族衣装などは、近隣の他の民族には見られないンデベレ独自の文化です。

【壁絵は民族の自己主張】

ンデベレの壁絵の特徴は、あざやかな色を大胆に使った幾何学模様を左右対称に配置するところにあります。こうした壁絵は南アフリカだけでなく、世界でも珍しいものです。壁絵は、「ここに住んでいるのはンデベレです！」という自己主張のあらわれとなっています。

壁絵を描く女性たち　…２０１６年の壁絵修復から

　壁絵は、女性たちの手によって描かれます。２０１６年の秋には、南アフリカより来日したンデベレ人女性により、２１年ぶりに壁絵が美しく修復されました。このときは最初の復元でも描き手として来日したレアさんをリーダーとして、年齢の異なる４人が協力して作業を進めました。ここでは、簡単に修復の様子をふりかえってみましょう。

①リーダーのレアさんがデザインを決め、壁に軽く粗い線を描きます。次に、線で囲まれた部分に塗る色を少しだけ目印としてつけておきます。使う色に決まりはなく、描き手のセンスで選びます。

▲目印を描くレアさん（中）と描き手たち

②ほかの描き手たちは、目印をたよりに枠内の色を塗っていきます。塗料は水性ペンキを使います。比較的短時間で乾くため、重ね塗りがしやすい特徴があります。

③粗い線を、太くまっすぐな線へと引きなおします。このとき、定規はいっさい使いません。

▲線をととのえるローズさん

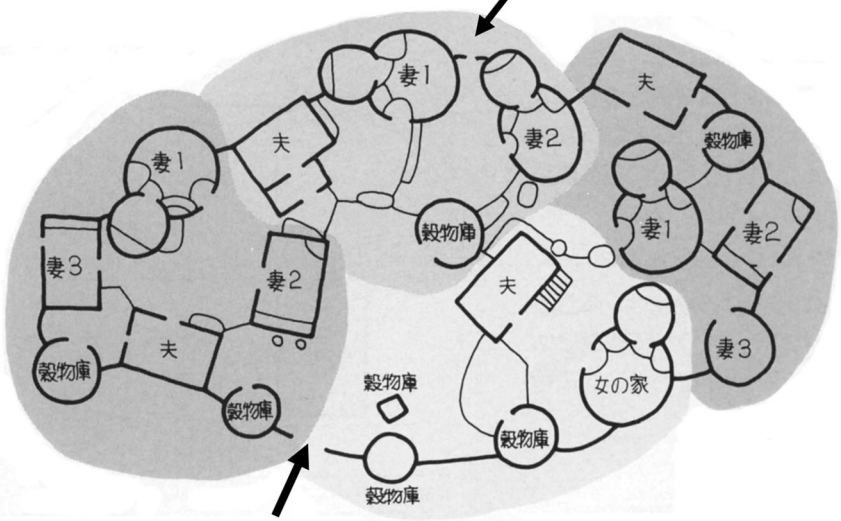
④はみ出してしまったり、とちゅうで線の太さが変わってしまったりすると、あとから重ね塗りをして修正します。輪郭をととのえるのは最年長のローズさんが担当しました。

このように細かい部分までこだわった作業によって壁絵が美しく仕上がりました！

西アフリカ カッセーナの家

西アフリカの国ブルキナファソのカッセーナの人びとは、サハラ砂漠の南に広がるサバンナ地帯で、モロコシやトウジンビエ等の雑穀を栽培する焼畑農耕民です。一夫多妻制度のもと、同じ屋敷地に血縁関係にある男たちとその複数の妻と子供たちが暮らします。四角い家には男性、ヒョウタン型や丸型の家には（四角い家にも）女性や子供が住みます。壁の幾何学模様を描くのは女性の仕事で、女性たちが好みで模様を決めて描きます。

ここは展示のための出入り口です



こちらが本来の出入り口です。

本来の出入り口は西か南で、東は悪い力の来る方向とされる。

複数の複婚(一夫多妻制)家族が集住
４人の男とその９人の妻の４世帯

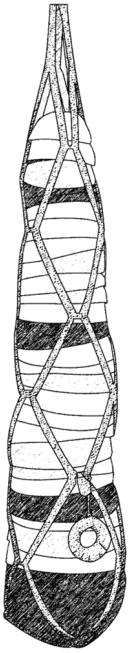
【砦のような屋敷】

建物を土塀でつないで囲んでいるのが特徴です。この地域はかつて近隣の民族間の争いが激しく、敵の侵入を妨げるために、家屋を土壁でつなぎ、屋敷全体を砦のようにしました。平らな屋根は農作物の干し場であるとともに、敵を見張り迎え撃つ所でもありました。

カッセーナ人の“ヒョウタン文化”

【ヒョウタンの使い道はたくさん】

ヒョウタンはアフリカ起源の植物と考えられています。カッセーナ人が住む西アフリカのサバンナ地帯では、野生のもの、栽培されたものなど、形も大きさも色々なものがあります。ヒョウタンは軽く、液体や細かい粉を入れることができ、殻が固く空気を通さないという性質があります。人々はこの性質を最大限に利用してさまざまな使い方をしています。飲み物、食べ物を入れる食器、おたまやひしゃく、ボウル等の調理器具として、収穫した穀物を選り分ける道具、大きなものは洗濯たらいや赤ん坊の行水用に、小さなものは小物入れや畑仕事用の種入れ容器に、他には太鼓の胴や木琴の共鳴器などにも利用されます。



【女性とヒョウタン】

カッセーナの主婦は、ザノと呼ばれるヒョウタンのモニュメントを持っています（右図参照）。油できれいに磨き上げられた球形または半球形のヒョウタンをいくつも重ねた物を自分の家の中央に吊るして飾ります。いちばん底のヒョウタンの器には、カリテ・バター（アカテツ科の野生樹の実から取る油脂、英語ではシア・バター）が入っています。カリテ・バターは調理、軟膏、石鹸、美容クリームなどに使います。使い続けていくうちにひびが入ってしまったヒョウタンを縫い合わせるのは女性の役割です。少し割れてしまったくらいで捨てることはなく、大事に直して使います。女性の生活とヒョウタンは深く関わり合っているのです。

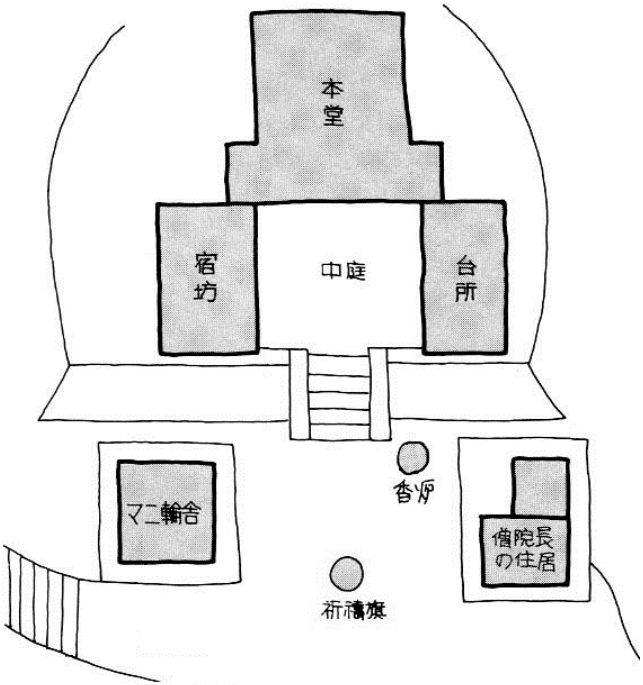
【サバンナのエコな暮らし】

ヒョウタンは道具に加工しやすいように生育途中で人の手が加えられます。収穫した後に形や大きさに合わせて加工され、修理をしながら大事に使い切った後、ヒョウタンはサバンナの土に還っていきます。このようにヒョウタン製の道具はとてもエコであるとも言えます。サバンナに住む人々は、自然の素材を最大限に活用して暮らしているのです。

ネパール 仏教寺院

この展示は、ネパール東部、標高約 3000mのヒマラヤ南腹にあるチベット仏教のニンマ派に属する、タキシンド寺院をモデルに復元したものです。

タキシンド寺院の本堂には釈迦如来を安置し、周囲の壁や天井にはチベット仏教独特の仏画や曼荼羅が極彩色でびっしりと描かれています。敷地内には宿坊やマニ輪舎が建ちならび、現地ではラマ僧が暮らしながら 修行 に励んでいます。この寺院は、近くに住むシェルパ人（16 世紀にチベットから移住し、ヤクの放牧や農耕を営みながら、ヒマラヤ越えの交易にも従事していた人びとで、最近は、登山ガイドとして有名です。）の信仰の中心になっています。



チベット仏教とは

インドにおこった仏教は、7 世紀ごろからヒンドゥー教やヨーガなどの影響を受けながら密教として発達しました。その後、チベットに取り入れられ、チベット仏教として今日まで受け継がれています。

◆ 五感を研ぎ澄まして修行する

チベット仏教の大きな特徴は、仏教の究極の目的である悟りの境地を生きた身で得ること（即身成仏）を目指すことです。そのため、真理を頭で理解するだけでなく、知覚、視覚、聴覚に訴えるものを使って修行に励みます。原色で描かれた仏画や曼荼羅、太鼓を鳴らしながら唱える読経などが、その特徴を表しています。曼荼羅は、世界(宇宙)の縮図です。修行僧たちは曼荼羅を目の前に見すえつつ、仏たちが作る世界を自分の心のなかに生み出すため修行に励みます。

◆ さまざまな仏たち

チベット仏教では非常に多様な仏の世界があり、数多くの仏が信仰されています。なかでも五仏(大日如来、阿しゅく如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来)と呼ばれる「如来」グループが重要な存在とされています。 *如来：すでに悟りを得た仏。

このほかに、おどろおどろしい姿をして日本人にあまりなじみのない「ヘールカ」と呼ばれる仏もいます。ヘールカは体が青く、象皮をはおり、手に頭蓋骨杯や生首などを持つ恐ろしい姿をしています。元々はヒンドゥー教の神（尊格）です。ほかにも菩薩、女神、護法神と呼ばれる男神も存在します。また、仏ではないが、チベット仏教では「祖師（ラマ）」が非常に重視されます。祖師は宗派の創立者です。

日本の密教は、6 世紀中頃に中国経由で伝わり、平安時代初期に空海らによって本格的に広まりました。チベット仏教は、インドから直接伝わった密教の流れをくむため、上記に述べたようなインド仏教後期の伝統が色濃く残っています。

ネパール仏教寺院　一輪廻転生

仏教で生まれ変わりのことを輪廻転生といいます。人は生前の行い(業=カルマ、カルマン)によって死後も別の世界に生まれ変わり、これを永遠に繰り返すという思想です。輪廻転生は、バラモン教から仏教が引き継いでいるものです。同様にバラモン教から発展したヒンドゥー教にも輪廻思想が反映されています。

六道輪廻（バヴァ・チャクラ）は、仏教の根本思想である輪廻転生を表しています。

▲六道輪廻図は、本堂１Ｆの壁に描かれています。

六道輪廻図には、人間のもつ煩悩の３つの代表である「欲」と「怒り」と「愚かさ」の象徴として、鶏・蛇・豚が描かれています。

「鶏」、「蛇」、「豚」はどこに描かれているのか、よ～く見て探してみましょう！

2026.04.

六道輪廻の世界 ― 無限に再生をくり返す

仏教では、すべての生ある物は死後もなんらかの形で存続するという普遍的信念があり、その一つの形態が輪廻転生です。生き物は死後、生前の行いに従ってしかるべき死後の世界に生まれ変わります。この輪廻する世界は、６つあるとされ、「六道」と呼ばれます。六道への生まれ変わりの連続を「六道輪廻」といいます。

- 「地獄道」：殺生や盗みなどの罪を犯した者が堕ちる恐怖と苦しみの世界
- 「餓鬼道」：飢えと渇きに悩まされ、栄養失調の餓鬼がいる世界
- 「畜生道」：動物の住む世界
- 「阿修羅道」：争いや戦闘が絶えず起きている世界
- 「人道」：人間界のこと
- 「天道」：天人が住む世界。「天道」は苦しみのない世界ですが、死後はまた他の世界に生まれ変わることになります。

生前の行いにより生まれ変わる世界が決まり、善い行いをすればよい結果に、悪い行いは悪い結果につながるという「因果応報」とも関係します。

解脱 ― どうすれば永遠の苦しみから逃れるのでしょうか

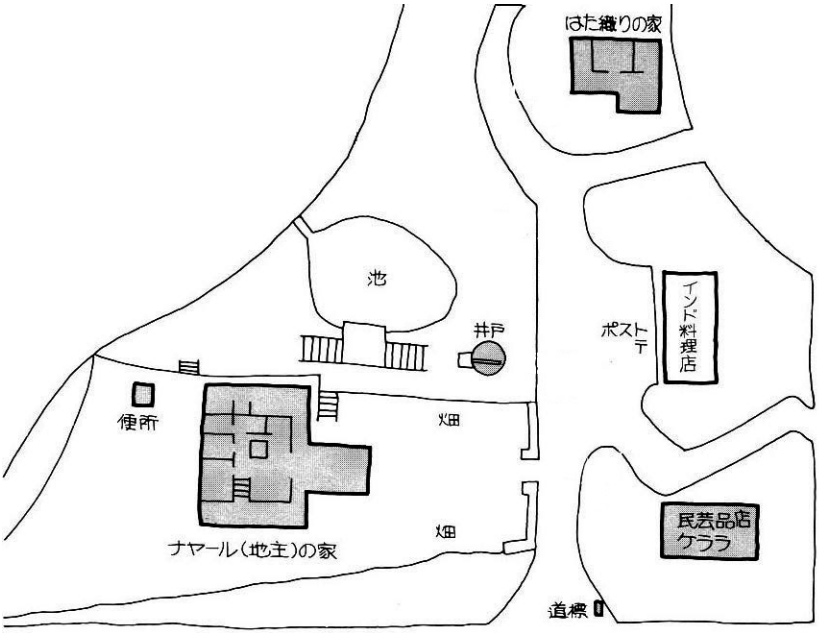
仏教は、「生きていることは、苦しみである」と考えます。そして、輪廻する世界にとどまることは、いつまでも煩悩の世界で苦しみ続けることを意味します。

苦しみの原因は悩みや迷いなどの煩悩であり、煩悩をすべて滅すことができれば、輪廻から抜け出すことができます。仏教では、これを解脱といいます。煩悩の束縛から解放されて、永遠の安らぎの境地（涅槃）に至ることが、仏教の究極の目標です。ちなみに、煩悩から解脱し、安楽の境地にいたった存在がブッダです。

インド ケララ州の村

ここでは南インド、ケララ州のココヤシやバナナなど緑があふれる美しい水田村をモデルに、上級階層（カースト）の家を中心に復元しています。

熱帯モンスーン気候のこの地の年平均気温は 27℃、もっとも気温が低い月でも 26℃もあります。また雨量は、年間 3000mm もあり、リトルワールドが復元している家屋の中でも、雨の多い土地の家です。



【ナヤール（地主）の家の壁】

この家の壁はラテライトと呼ばれる素材でできています。ラテライトとは、土の鉄分が酸化してできた熱帯の赤土のことで、とても固いために建築材料として使われます。

民族衣装：サリーは１枚の布地

サリーは、インドやネパール、パキスタンなど南アジア地域の女性が着用する民族衣装です。実際、畑で働く女性や都会で働く女性など、多くの女性が着ています。布の一端を肩にかけ、裾を地面すれすれにして歩く姿はとても優雅です。

サリーは長さ６m程度、幅 1.2mほどの一枚布。縫い合わせていないという点が大きな特徴で、素材は絹や木綿、化学繊維などです。もっとも高価なのは絹で、晴れ着や結婚式などの儀礼の衣装とされ、木綿製のサリーは値段が安く、普段着とされます。模様は、縞、チェック、唐草、花などさまざまです。刺繍、手描き、木版プリント、かすり、絞りなどの技法でつくられます。

サリーは体形に関係なく選びやすいため、しばしば贈答品に用いられ、重宝 されます。そのため、女性は数十枚のサリーを持っていることが一般的なことです。

【サリーの着方】

①布の端を右腰のペチコートにはさんで止め、前から後ろへ回す。

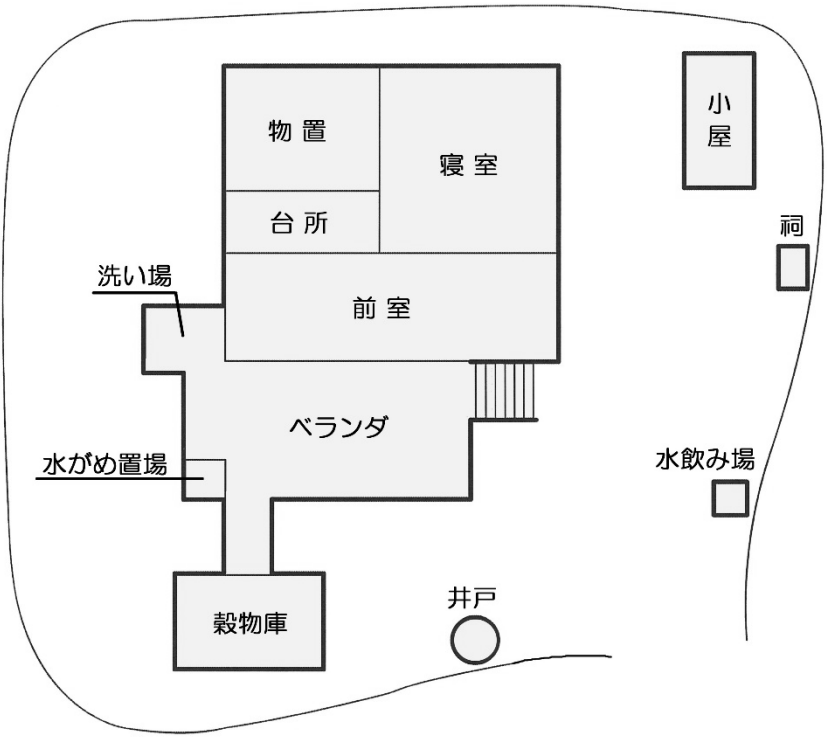
②右手でプリーツを７回ほどとり、ペチコート前面にはさみこむ。

③残った布を再び後ろへ回し、胸から肩にかけて後ろへ垂らす。

サリーは、すそを垂らしてくるぶしを隠す点が重要で、逆におなかやおへそは露出させてもかまいません。

タイ ランナータイの家

タイ北部の平野にあるランナータイ地方で、水稲耕作をしている人びとの家です。高床の家屋には、食事や作業の場になるベランダと、寝室、かまどのある母屋と穀物庫があります。床下は作業場、物置、家畜小屋として利用されます。

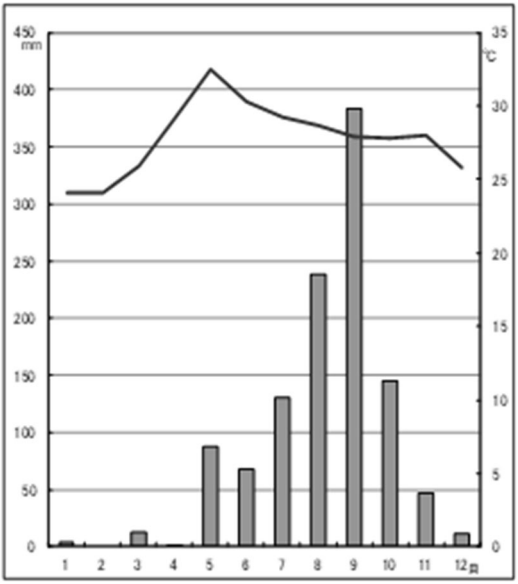


【ランナータイとは】

「ランナータイ」は 13世紀の末から 20 世紀の初めまで、チェンマイを中心にタイ北部の山間盆地を支配していた王国の名前で、独自の文化や美術、言語などを持っていました。人口の多くはタイ・ユアンと呼ばれるタイ系の人びとです。

気候と住まい：暑さと湿気をやりすごす

ランナータイ地方の気候は、季節風によって 5 月から 11 月にかけての雨期、11 月から翌年の 4 月にかけての乾期にわかれています。右の降水量をあらわす棒グラフで、雨期と乾期の違いが、はっきりとわかります。年間平均気温は 27.8℃もあり、年間を通じて 20℃以上となっています。犬山の年間平均気温は 16.3℃で、11℃も差があります。



ランナータイの月別平均気温と降水量

【高床式の家屋】

地面からの湿気が屋内に入りにくくするために、床を高くしています。また、床下を風が抜け、涼しくする工夫でもあります。さらに、雨期にはたくさんの雨が降り、一帯が水浸しになることもあります。屋内に水が入らないように、高床には洪水対策の役目もあるのです。

【雨対策の屋根】

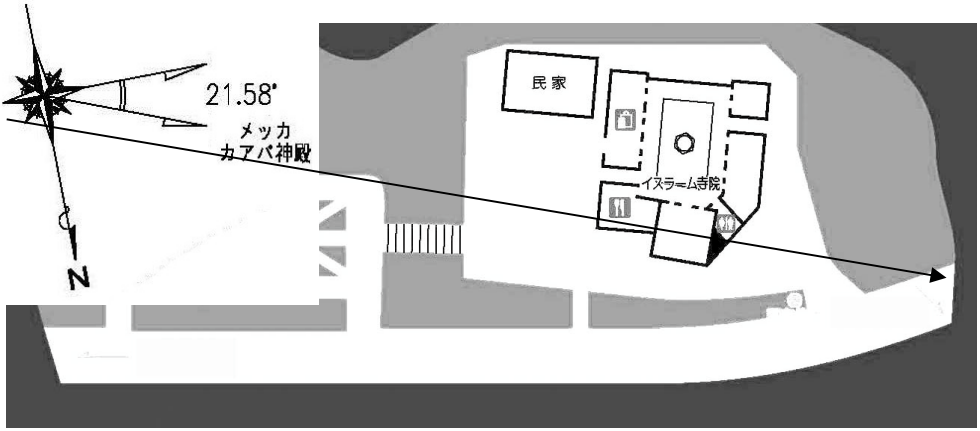
家屋の屋根は雨が多いため、水切れが良いように、薄い素焼きの瓦を葺き、傾斜を強くしています。

【チーク材の家屋】

タイ北部はかつて良質なチーク材の産地でした。チーク材は硬く、耐久性に富むため湿度の高いこの地の家屋の材料としては最適なものでした。

「トルコ イスタンブールの街」

古来より文明の十字路として栄えてきた世界有数の大都市、イスタンブール。1600年もの間、いくつかの帝国の首府であった旧市街は、ユネスコの世界文化遺産にも指定されています。ここに復元したイスラーム学院（メドレセ）は、オスマン帝国時代に建設され、今も旧市街にたち活用されている建物をモデルとしています。



【微妙にずれた配置　キブラ Qibla】

周遊路や側溝からみて、家屋が微妙にずれているのをわかりますか？今回の建物の配置の軸は、キブラと呼ばれる方角です。イスラームを信じる人びと（ムスリム）は１日５回の礼拝を義務としています。その礼拝は聖地メッカのカアバ神殿（サウジアラビア）に向かってするものと決まっており、その方向を示すために、復元したメドレセの講義室にもミフラーブというくぼみを壁に設けてあります。このミフラーブのある壁を正確にメッカに正対させるため、厳密に計算して、家屋の配置を少しずらしました。

リトルワールドの小さなこだわりです。

2019.03

メフメット･アーってどんな人？

展示家屋のイスラーム学院（メドレセ)を建てた人、メフメット･アーはオスマン帝国のトプカプ宮殿で、ハーレムを司る責任者でした。ハーレムはスルタン（王、皇帝）のプライベート空間であり、スルタンの妃たちや子どもたちが暮らす場所でもありました。御所でいえば「後宮」、江戸城でいえば「大奥」のようなところです。

この役職の正式名称はダリュッサーデ・アースですが、親しみを込めてクズラルアースと呼ばれました。クズは「乙女」という意味で、ハーレムに暮らす女性たちをとりまとめる役目からついたそうです。

次の王となる皇太子やその母と常に接し、親身に世話をし、信頼を得なければ務まらない役目です。もちろん、スルタンとも日頃から接する立場ですので、自然と発言権が増し、宮殿の中では、スルタン、大宰相に次ぐ高い地位にありました。

クズラルアースになるためには、いくつかの条件がありました。帝国の中枢を担う人材ですので、頭脳明晰であることは当然です。ハーレムを守るという重要な役目のためには、さらに清廉潔白、品行方正でなければなりません。スルタンの妃たちとの清い関係をはっきりさせるために、ハーレムに務める男たちはみな去勢をした者、宦官でした。

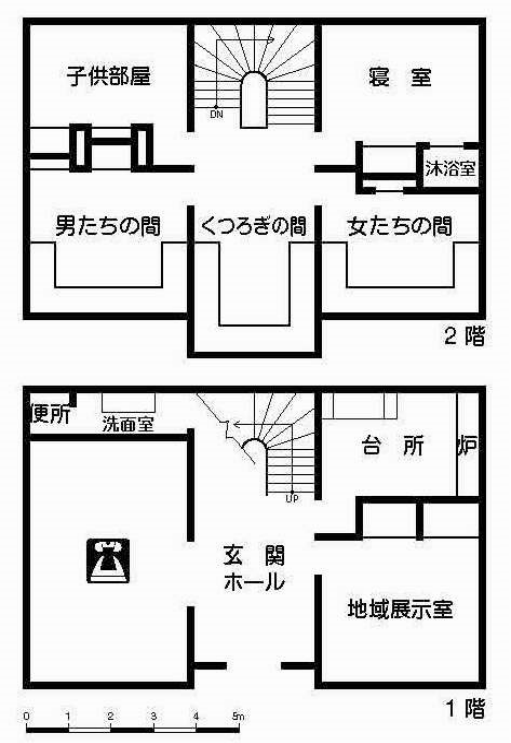
ムスリムは去勢を禁止されているので、異教徒・異民族の少年を去勢して宦官とすることが常でした。メフメット･アーもトルコ人ではありませんでした。彼はアビシニア、今のエチオピア出身の黒人でした。奴隷とされ、去勢され、エジプト経由でイスタンブールに連れてこられる途中で、イスラームに改宗し、頭角をあらわし、出世したのです。

妻子もないメフメット･アーは、宮廷生活で得た財を寄進し、メドレセやモスクやハマムといった、人びとの役に立つ施設をつくったのです。このモデルとしたメドレセ以外の建物もイスタンブールには残っており、人びとの集う場所として活用されています。

「トルコ イスタンブールの街」

古来より文明の十字路として栄えてきた世界有数の大都市、イスタンブール。1600 年もの間、いくつかの帝国の首府であった旧市街は、ユネスコの世界文化遺産にも指定されています。ここに復元した伝統的民家は今も旧市街にたち活用されている建物をモデルとしています。

展示家屋「イスタンブールの民家」



【家族をつなぐソファとセディル】

くるっと階段を上がった 2 階が生活空間です。あがりきったところは**ソファ**と呼ばれ、2 階の各部屋を連結する役目をになう重要な空間です。

ソファに連続して、**エイバン**というくつろぎの間、もてなしの場があります。マットレスを敷き詰めた作りつけのベンチは、**セディル**といいます。

セディルは、トルコの伝統的民家には欠かせないものです。

民家建築情報
木造３階建て住居（３階部分は屋根裏としており、展示はありません）
建築面積 76.06 ㎡（約 23 坪） 延べ面積 146.82 ㎡（約 44.5 坪）

かつての高級住宅街の家

復元のモデルとした民家は、19 世紀末にスレイマニエ・モスクのそばに建てられたものです。残念ながら、誰が建てた家かは判りません。しかし、近隣にはオスマン帝国の地方の県知事がイスタンブールで宿泊し、客人をもてなすための建物があり、その建築年代も同時期なので、19 世紀末当時は高級官僚など富裕層が暮らす住宅街であったと考えられます。

イスタンブールは、7つの丘の上にたつ街といわれていますが、そのひとつがスレイマニエ・モスクのある丘です。見晴らしも良く、風通しも良い丘の上の瀟洒な家屋。この家の持ち主も、それなりの地位の人、そしてそれなりのお金持ちであったと想像されます。

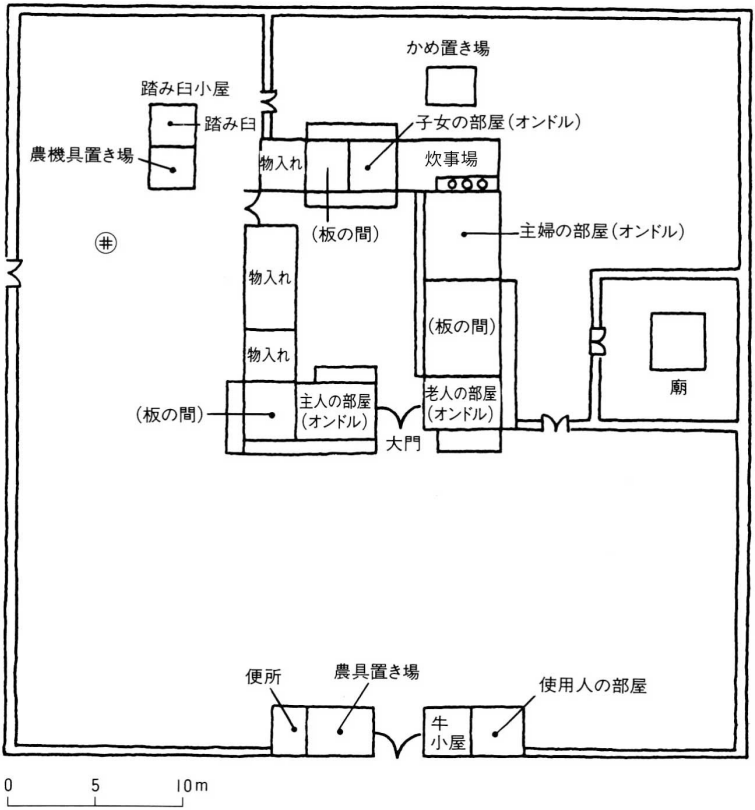
ナザールボンジュ　Nazar Boncuğu

民家の玄関の上には、目玉をかたどった青いガラス玉がかかっています。トルコ語でナザールボンジュというお守りです。ナザールが「目」、ボンジュが「ガラス玉」を意味し、この家の人たちへの「ねたみ」、「そねみ」、「うらみ」といった悪意をもった視線を避ける、除けるためのものです。この悪意をもった視線を邪視とよびますが、意識して投げる邪視だけでなく、無意識に投げかける邪視もあり、容易に避けることはできません。そうした邪視を避けるために、トルコの人びとは質素な生活を心がけているのですが、どこからこうした悪意を受けるかわからないために、青い目玉のお守りを家の壁にかける習慣をもつのです。

☞ トルコのお土産店「ラーレ」には、いろいろな形のナザールボンジュがあります。ぜひ、ご自分のために、あるいはおみやげに、お求めください。

韓国 地主の家

韓国のほぼ中央部、慶尚北道の山村で、かつての地主（両班）が1937 年に建てた家を移築、復元しました。口の字形の母屋には、主人の部屋と主婦の部屋が棟を分けてあります。これは、「男女七歳にして席同じからず」という儒教の教えに基づくものです。

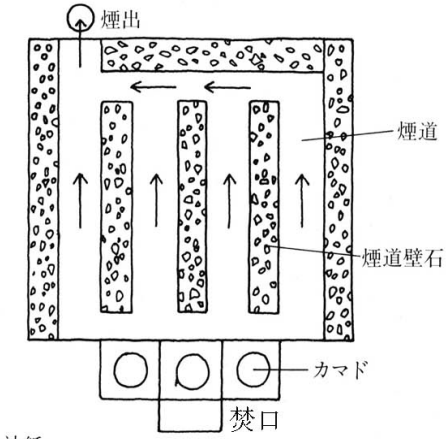


くらべてみよう～見学のポイント

地主の家と**農家**は、慶尚北道の同じ村に建っていたものです。家のつくり、材料、広さなどからさまざまな違いを見ることができます。２つの家をくらべて、どこが違うのか・どうして違いがでるのかを考えてみましょう。

快適に住まう：季節に合わせた居室

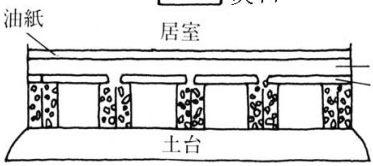
部屋の床には、土間、オンドル床、板床の 3 種類があり、土間は物置に、オンドル床と板床は居室に使います。オンドル床の間は、熱を逃がさぬように寒さ対策をこらした冬用の部屋で、板床の間は少しでも風が入るように暑さ対策をほどこした夏用の部屋です。

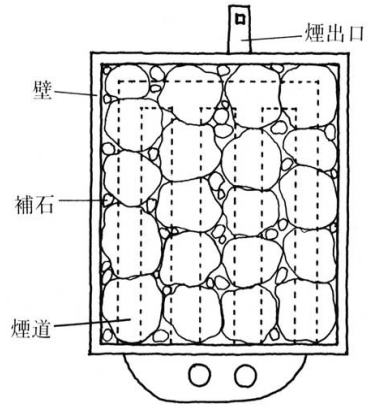


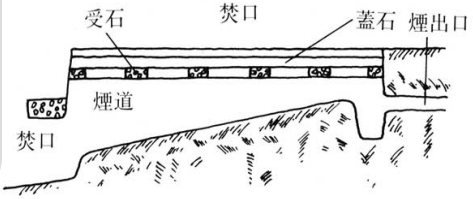
オンドル　ー冬用の床暖房

オンドルとは床暖房のことです。床下に石を並べて数本の溝をつくり、この溝の天井に平らな石を置き、煙の通り道とします。天井の石の上に粘土を叩いて平らにし、その上に紙を貼り、さらに油のついたオンドル紙を貼ります。

溝を通った煙が石と粘土と紙を通して床に熱を伝えます。煙を発生させる焚口と、トンネルを通った煙が出ていく煙突の間の勾配のつけ方が難しく、それにより床の暖かさが違ってきます。





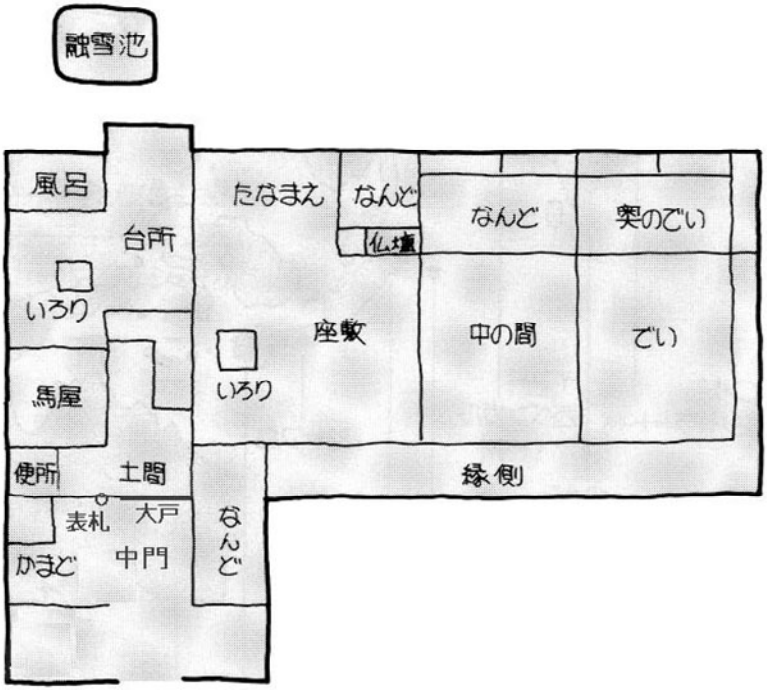


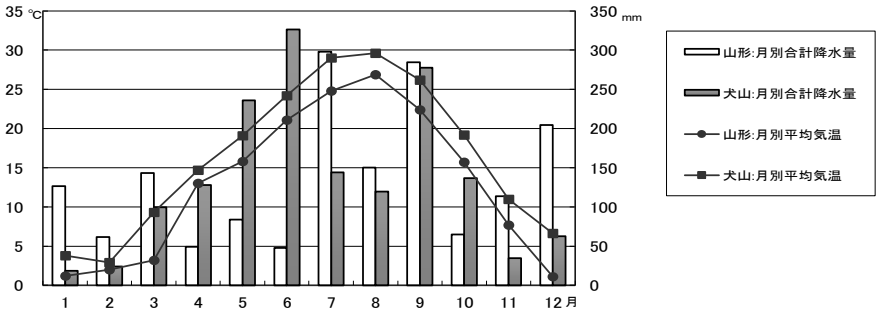
オンドル床の間と板の間では、床のほかにもそれぞれの**季節に合わせた工夫**がほどこされています。どんな工夫があるかさがしてみましょう。

ヒント：天井/かべ/とびら

山形県 月山山麓（がっさんさんろく）の家

豪雪（ごうせつ）地帯の出羽山地（でわさんち）、月山（がっさん）の麓（ふもと）、月山沢（つきやまざわ）に、1767 年に建（た）てられた中門（ちゅうもん）づくりの養蚕（ようさん）農家を移築（いちく）しました。月山沢は 1976 年にダム建設のため廃村（はいそん）となり、水没（すいぼつ）しました。





気候と住まい：雪とともに暮らす冬

表面のグラフをみると、12 月～2 月にかけて、山形月山山麓の方がここ犬山よりも月別平均降水量が多くなっていますが、その多くは雪です。冬のあいだ、3～4m もの雪が月山山麓では積もります。

【中門づくり】

曲がり屋の一種で、日本海側の豪雪地帯に特徴的な建築様式です。土間の手前にある大戸が家の入口で、中門は雪を払ったり、農具などの物置きとして使われ、屋内の暖気を逃がさない工夫です。冬の間は、中門の外に“雪ローカ”と呼ぶ突出部を設けます。

【雪囲い】

深雪地帯では、冬になるとカヤやムシロで家を囲みます。これを雪囲いといいます。これは寒さ対策であるとともに、雪が家にくっついて押しつぶさないようにという工夫です。

【明かりとりの障子窓】

雪囲いは障子の上の鴨居あたりまでおおうため、家の内部は薄暗くなってしまいます。そのため、軒をできるだけ高くあげ、その壁に窓を設けて、採光口とします。

【板壁】

土壁は雪に弱く、崩れてしまうので、板壁とします。

【重さ対策】

雪の重みに耐えるように、太くてがっしりした木材を柱や梁に使います。

【雪おろし】

“雪ぼり”といい、ひと冬に６、７回は屋根に登って、雪を融雪池に落とし、水を流して溶かします。

【道踏み】

冬、子どもたちは朝起きると、カンジキをつけて、
まず道踏みをします。毎日のように、一日に何回もします。